

## フランス人音楽家アンリ・ジル＝マルシェックスと日本文化

### The French Musician Henri Gil-Marchex and his Relationship with Japanese Culture

白石朝子 Asako Shiraishi 愛知県立芸術大学音楽学部非常勤講師

---

#### Abstract

Henri Gil-Marchex was a French pianist who was internationally active and contributed to cultural exchange between France and Japan in the 1920s and 1930s. He visited Japan four times, first in 1925, twice in 1931, and again in 1937, giving many concerts and lectures in various cities.

The first visit was arranged by Jirohachi Satsuma, a well-known wealthy Japanese aristocrat in Parisian society at the time. He presented twenty-two concerts in three months. Among them, the most ambitious was a six-night concert series at the Imperial Hotel in Tokyo, which reflected his own musical intentions. Gil-Marchex conceived a special grouping of works based upon these three themes: *La musique subjective*, *La musique evocatrice*, and *La musique de danse*.

Six years later, in 1931, Gil-Marchex made his second visit to Japan. This time, the French government sent him to many foreign countries as a missionary of French art and culture; thus his visit to Japan was fully sponsored.

Another six years later, in 1937, Gil-Marchex visited Japan again, in what was to be his last tour. For this visit, he received support from the Society for Promotion of International Cultural Relations in Japan.

With each successive visit, he deepened friendships with Japanese composers and music-lovers. He supported the activities of the organization “The Japan Society for contemporary Music,” and played their works at a concert in Tokyo. Simultaneously, he contributed articles introducing Japanese music and composers to French magazines.

It is fair to say that Gil-Marchex made a significant contribution to the development of Japanese musical culture and, in turn, was himself influenced by the exchange. His original composition for piano, *Deux Images du Vieux Japon*, is a reflection of Japanese culture and history.

Gil-Marchex successfully introduced French music to Japan, in which German music had been dominant since the time of the Meiji Restoration. He observed the history of Western music from different perspectives, and explained them through his own performances, in order to give Japanese audiences a better understanding of the subject.

In addition, by researching Japanese music and strengthening relationships with Japanese composers, Gil-Marchex generated a new trend in the Japanese composer's circle, which Matsudaira and Osawa were to represent later. His writing, lecturing and composing activities were reported also in France, and thus he was recognized not only as pianist, but also as a researcher of Japanese music.

In conclusion, Gil-Marchex played a significant role in cultural exchange between Japan and France: firstly, through introducing French music to Japan and vice versa; and secondly, by supporting the activities of Japanese musicians over an extended period of time.

### **Program note**

Hisato Osawa : *Three Pieces of Spring, "Teichu"*

Hisato Osawa (1906–1953) studied in Boston from 1930, and in 1934 he moved to Paris to study under Paul Dukas and Nadia Boulanger. The title of this work derives from the composition's year (the year of Teichu). The premiere was performed by Gil-Marchex, who came to Japan in the same year (July 3, Kaiin Kaikan).

H.Gil-Marchex : *Lune d'automne à Idzoumo*, from *Deux images du Vieux Japon*

*Deux Images du vieux Japon* was completed in 1936; it consists of two pieces, *Retour du Yoshiwara* and *Lune d'automne à Idzoumo*. *Lune d'automne à Idzoumo* was composed based on the ancient Japanese myth stating that every year in October (Kannazuki), the eight million Gods of Japan congregate at Izumo.

H.Gil-Marchex : *Sept Chansons de Geishas*

*Sept Chansons de Geishas* was completed in 1935. The lyrics were excerpted from *Chansons des geishas*, which was published in France in 1925. This book, which was translated by Steinilber Oberlin and Hidetake Iwamura, is a collection of folk songs that geishas performed at their parlors. Gil-Marchex said the following about geishas: "they have beauty and intelligence, and have received education on all the important etiquette and knowledge. Their dance is like supple branches being softly swayed by the breeze."

## はじめに

アンリ・ジル＝マルシェックス (Henri Gil-Marchex 1894-1970) は、1920年代、30年代に国際的に活躍し、日仏の文化交流に貢献した音楽家である<sup>1</sup>。

彼は、1911年(17歳)にパリ音楽院を首席で卒業した。在学中のプログラムや成績などの資料から、彼がベートーヴェンやシューマン、ブラームスなどを学んだことがわかる。しかし音楽院卒業後は、当時の現代作品を中心に幅広いレパートリーをもち、フランス国外でも演奏会を開催した。スペイン、イギリス、ラトビア、ロシアなどを訪れ、各地ではドビュッシーやラヴェルはもちろん、ルーセル、ファリャなど、当時最先端の作曲家による作品を演奏した。1927年から30年には、エコール・ノルマル音楽院で教鞭をとりながら、コンサート活動を行った。

彼は作曲家からも信頼の厚いピアニストであり、1924年には、ラヴェルのヴァイオリン作品《ツィガーヌ》初演に伴奏者として携わった。また彼に献呈されたピアノ作品として、ルーセル《プレリュードとフーガ》シュルホフ《ピアノソナタ第3番》などが挙げられる。

このように、彼は1920年代、当時の音楽中心地であったパリを拠点に国際的に活躍したが、1925(大正14)年から37(昭和12)年にかけて、計4回日本を訪れた。彼は日本の全国各地で演奏会やレクチャー・コンサートを行った。

日本を訪れる外国人演奏家は当時もいたが、ジル＝マルシェックスには、ほかの来日演奏家とは異なる、大きな点があった。それが彼の『日本文化への眼差し』である。

世界中の国を訪れていた彼が、なぜ、日本へ眼差しを注ぎ、日本の文化に惹かれたのか。このレクチャーでは、ジル＝マルシェックスの日本での音楽活動を紹介するとともに、彼の日本文化に関する記述を読み解くことで、彼の『日本文化への眼差し』を考える。

## ジル＝マルシェックスの音楽活動

### (1) 1925年の日本滞在

1925年彼の初来日は、当時パリの社交界で名の知られた薩摩治郎八(1901-1976)の斡旋によるものであり、彼の来日については多くの新聞記事や雑誌記事が掲載され、日本の楽壇から相応な期待をもって迎えられた。

彼は、約3か月の滞在中に22回の演奏会を行った。彼の意図が最もよく反映された演奏会は、帝国ホテルで行われた6夜の演奏会である。彼は『主観的演奏会』『追想的演奏会』『舞踊音楽演奏会』の3テーマによって曲目を構成した。<sup>2</sup>彼が行いたかったのは、いわゆるテクニクを誇示することで聴衆を喜ばせるような、興業的な演奏会ではなかった。彼はバロックから近現代まで、ピアノ音楽史を網羅した曲目を系統立てて構成したのである。

彼は51ページにわたる豪華な演奏会パンフレットに掲載された全ての演奏作品に対する解説を記した。彼は、これにより日本の聴衆にフランス・ピアノズムだけでなく、ピアノ音楽史の知識や当時音楽中心地であったパリの、最新の音楽を知らせた。

この演奏会では、世界初演<sup>3</sup>を含む50曲の日本初演が成し遂げられた。演奏会には、日本の文化人も数多く足を運んだ。作曲家の松平頼則や小松耕輔、また音楽評論家の中島健蔵、小説家

の梶井基次郎などの著書に、記憶が記されている。

## (2) 1931年-32年の日本滞在

1931年の再来日が前回と大きく違う点は、フランス政府が積極的に支援したことである。当時フランス外務省が自国芸術の対外宣伝の一環としてジル＝マルシェックスを世界各国に派遣しており、日本への派遣も主体的に支援した。在日フランス大使の手紙には以下のように書かれており、ドイツ音楽偏重であった日本音楽界の状況を把握したうえで、政府が彼を日本へ送ったことがわかる。

ヨーロッパにおいては、ドイツ人が唯一の創造者や音楽家ではないが、日本では彼らが20 - 30年の間に自分たちの考えを押し付けていたということと、フランスもまた、日本人が大きな興味を抱くような独自の楽派を生み出したことを示すことは、自らの芸術伝統を尊ぶことに配慮し、西洋の様式を吸収しながら、西洋の国と対等になりたいという野心をもつ日本国民にとって、重要である。<sup>4</sup>

音楽活動の特徴としては、1925年と違う点が二つ挙げられる。第一に演奏会ではなくレクチャー付の形態で音楽活動を行ったということ、第二に、会場として全国各地の大学など教育機関が含まれたことである。彼は日仏会館や各大学で『フランス音楽と日本人の感受性』などをテーマに、フランス音楽に重きを置いたプログラムによって講じ、その普及に努めた。

## (3) 1937年の日本滞在

1937年、彼は4度目の来日をした。今回の大きな特徴はフランス政府ばかりでなく、日本の国際文化振興会からも援助を受けたという点である。国際文化振興会は1934年に創設された機関で、ジル＝マルシェックスは「外国人の東方文化研究に関する援助」の項目で選ばれた。<sup>5</sup> 彼が日本音楽研究のために日本政府から招聘されたことから明らかなように、日本とフランス両国が、彼に日仏文化交流の試みを担わせた。

音楽活動においては日本の積極的な支援があり、5月に催した明治生命講堂の演奏会では、ジル＝マルシェックスの後援会員として政治家や資産家など多くの名前が記された。<sup>6</sup>

## ジル＝マルシェックスによる日本への影響

### (1) 1925年の音楽活動から

この頃の日本音楽界では、ドイツ音楽が中心とされていた。その背景には、東京音楽学校（現在の東京芸術大学）が1887（明治20）年の創設時よりドイツお雇い教師を中心に、ドイツ音楽に重きを置いた教育を行っていたことが挙げられる。彼の演奏が日本の音楽愛好家に衝撃を与えたことは想像に難くない。

また作曲家の松平頼則、石田一郎、清瀬保二は、音楽雑誌の記事で自身が影響を受けたことを

明らかにしている。例えば、清瀬は「大いに感激した。フランクの人となりや音楽事典で知り、それからフランス音楽を見直すようになり、ドビュッシーやフォーレに入って行った」<sup>7</sup>と述べている。ジル＝マルシェックスの来日は、日本人のフランス留学を勧めるきっかけとなり、彼の演奏は、日本の作曲家を志す若い青年たちに影響を与えた。

## (2) 1931年-32年の音楽活動から

松平頼則は、前回のジル＝マルシェックスの来日においても、大きな影響を受けたと自身で述べていたが、その影響は1931年の彼の音楽活動にあらわれている。彼は2度のピアノリサイタルを行った。プログラムはフランスの近代作曲家で構成され、松平はジル＝マルシェックスに個人的なレッスンを受け、ドビュッシーの前奏曲6曲について演奏法を雑誌で提案している。<sup>8</sup>松平はその後ピアニストとしてではなく作曲家として活躍するが、これらの経験は彼の音楽観を形成する礎となったであろう。

また、ジル＝マルシェックスの講演活動は、須永克己の日本音楽観に影響を与えた。須永は1900年に生まれ、田邊尚雄などのもと音楽研究を学び、日本大学芸術科でも教鞭をとったが、1935年に若くして亡くなった音楽学者である。彼は、「フランス音楽と日本芸術の間の調和を論じたことは、強い衝撃を与えた…私たちは、日仏の間の友好的な関係を築きあげるためにあなたが示す情熱に尊敬を表す。」<sup>9</sup>と述べている。

## (3) 1937年の音楽活動から

ジル＝マルシェックスは、1937年に日本現代作曲家連盟の演奏会に助演し、清瀬保二、池内友次郎、江文也の作品を演奏した。さらに彼は日本人作曲家たちと交流を深めてフランスの雑誌上で「現在日本には、大変期待できる若い作曲家たちがおり、彼らの努力が結晶するだろうと感じられる。」<sup>10</sup>と述べ、伊福部昭や清瀬保二、江文也を始め7名の作曲家を紹介している。

特に、大澤壽人とは強いつながりを持っていた。彼は、ジル＝マルシェックスが1925年11月25日に関西学院講堂で演奏会を行った際に中等部に在籍する生徒であり、演奏を聴いて感銘を受け、音楽の道を志した。ジル＝マルシェックスは、パリで留学中の大澤と親交を深め、彼の作品を日仏において初演した。1935年11月8日にパリのMaison Gaveauでジル＝マルシェックスは、《ピアノ協奏曲第2番 Deuxième Concerto pour piano et orchestre》のソリストを務め、1937年7月3日、海員会館でのリサイタルにおいて《丁丑春三題 Trios morceaux de printemps “Teichu”》の世界初演を行っている。

## ジル＝マルシェックスの日本への眼差し

ジル＝マルシェックスは、精力的な音楽活動の一方で日本をどのように見つめたのか。彼は初来日時から日本音楽研究を行い、日本の音楽文化について8本の論文を著している。

まず彼は、日本の伝統文化が近代化の進むなかでも堅く守られていることに驚いた。能と皇室典礼の音楽を実際に見聞きし、論文では舞台構成や楽器について紹介したほか、生活に根付いた

音楽についても述べている。生活に根付いた音楽として例えば茶摘みのうた、まりつきの歌などを挙げ、日本音楽の特徴をメロディとリズムに見出し、西洋の作曲家にとっても大変有効なものであると述べた。

彼は、1931年の来日までの4年間に日本の伝統芸能について学び、同年の論文では、能、文楽、歌舞伎、舞楽、浄瑠璃について紹介し、琴、三味線、鼓、琵琶、箏など使用される楽器とその音色、奏法について詳しく述べている。この伝統文化や和楽器に関する知識は、《古き日本の二つの映像》の作曲につながった。

彼は、その一方でフランス音楽と日本の感受性、また日本音楽の価値に関して次のように述べている。

日本人が自然と向かい合う美への姿勢は、クーブラン、ラモーからラヴェル、イベールに至るまでフランス人の音楽に対する姿勢とまさに一致する…慎みのある表現と精神的なものに対する敏感さのために、フランス音楽は、古い作品においても、現代作品においても日本人に合っている。…日本の伝統と手法は、こんなにも奇跡的に変わることなく残っており、これらは、私たちの芸術にとって革新の機会となるだろう。私たちは確信的に学ぶことがある。極東の音楽を真剣に研究するべきである。日本人は、私たちの西洋音楽を研究しているではないか。<sup>11</sup>

ジル＝マルシェックスは、日本人とフランス音楽の関係を見つめ、日本音楽を高く評価した。そして、1937年以後は国際文化振興会からの援助もあり、日本音楽に関する5本の記事や論文を記している。また雑誌には、彼が日本音楽についてインタビューに答える記事も載せられ、その中で彼は特に作曲界に関して、ドイツ音楽偏重であった教育体制への批判と日本音楽界の進歩を述べ、更なる発展を目指すための提案を行った。

長い間、日本の音楽はドイツ音楽の足跡を追っていたが、私の一回目の滞在から日本は大きな進歩を遂げた。…以前には、日本はドイツ音楽の影響が支配的であったが、現在は、フランス、ロシア、スペインの作品が最先端であり、この影響はとりわけ良いもので、日本音楽を良い方向へ向かわせた。…これまで日本人は伝統的音楽を保ち、一方で西洋音楽に上手に適応してきた。…その技術は、すぐに模倣の域を超えるだろう。日本がブラームスの重流、もしくはドビュッシーの重流になってはいけない。…これほど高い習得能力があれば、確実に素晴らしいことができるだろう。<sup>12</sup>

これは、12年前から日本の音楽界の発展を見つめてきたジル＝マルシェックスならではの発言だといえるだろう。

## まとめ

これまで述べたように、ジル＝マルシェックスは、日本の音楽界に影響を与えた一方で、日本の文化へ熱い眼差しを向けた。日本音楽研究に関する執筆活動や講演活動、作曲活動は、フランスで報道され、彼はピアニストのみならず、日本音楽研究者の一人としても認識されていくこととなる。彼は、日本の音楽界の発展をフランス音楽に紹介するだけでなく、長期にわたって日本の音楽家の活動をも支えたといえることができる。そして彼は、作曲作品《古き日本の二つの映像》や《芸者の七つの歌》の中で、日本文化を取り入れ、新しい作品に昇華させた。

## プログラム解説

レクチャーに続くコンサートでは、ジル＝マルシェックスの日本への眼差しがあらわれた音楽を実際に聴いていただいたために、彼の作品と、彼と親交の深かった大澤壽人の作品を取り上げた。以下、簡単な解説を掲載する。

大澤壽人：《丁丑春三題》

大澤壽人は、1930年からボストンで学んだ後、1934年にパリへ渡ってポール・デュカ（1865-1935）とナディア・ブーランジェ（1887-1979）に師事した。この作品の題名は作曲年（丁丑（ていちゅう）の年）に由来する。

### 1. 〈春宵紅梅〉

静寂の中で高音域の分散和音が響き、遅れて中音域で断片的な旋律が現れる。曲中の2つの終止部分には、2拍子と3拍子が巧みに用いられている。

### 2. 〈無為即興〉

第1曲の分散和音の中心音であったF#によって開始される。タイトルが示す通り、つかみどころのない雰囲気を変拍子や自由な拍節によって表されている。

### 3. 〈春律酔心〉

自筆譜には「Caprice」と記載されている。前2曲とは様相ががらりと変わり、途中には《元禄花見踊》の旋律が現れ、高揚の中で曲を閉じる。

アンリ・ジル＝マルシェックス：《古き日本の二つの映像》より 〈出雲の秋月〉

《古き日本の二つの映像》は、1936年に完成され〈吉原帰り〉と〈出雲の秋月〉の2曲から成る。ジル＝マルシェックスは、この作品の作曲にあたって、日本音楽を模倣するのではなく、滞在時に聴いた旋律やリズムを取り入れ、日本で感銘を受けた数々の印象を描いたと楽譜に記している。〈出雲の秋月〉は、毎年10月になると全国の八百万の神々が出雲に集まるという日本の神話と日本人が恋心を募らせる月という題材をもとに作曲された。

アンリ・ジル＝マルシェックス：《芸者の七つの歌》

《芸者の七つの歌》は1935年に完成された。歌詞は1925年フランスで出版された“Chansons des geishas”『芸者の唄』より抜粋されている。本書はエミール・スタイニルベル＝オーベルランと岩村英武共訳によって芸者がお座敷で披露した俗謡を集めたものであり、アンリ・ド・レニエ（1864-1936）が称賛するなど高く評価された。ジル＝マルシェックスは、芸者について「美と知性を持ち、大切なすべての作法、知識の教育を受けている。彼女たちの踊りはしなやかな枝がそよ風に柔らかく揺れるのに似ている」と述べた。



展示資料とレクチャーのスライド



白石朝子氏の演奏の様子



白石朝子氏（ピアノ/レクチャー・右）と河合玲子氏（ソプラノ・左）



[注]

- <sup>1</sup> ジル＝マルシェックスによる日仏文化交流については、以下の拙著を参照されたい。「アンリ・ジル＝マルシェックスによる日仏文化交流の試み—4度の来日（1925-1937）における音楽活動と日本音楽研究をもとに—」『博音第4号・愛知県立芸術大学大学院音楽研究科博士論文』2014年3月26日、pp.1-120
- <sup>2</sup> 『主観的音楽演奏会 Consacrés à la musique subjective』（10月10日、11日）、『追想的音楽演奏会 Consacrés à la musique evocatrice』（10月17日、24日）、『舞踊音楽演奏会 Consacrés à la musique de danse』（10月25日、11月1日）
- <sup>3</sup> 《五時フォックス・トロット；“子供と魔法”による幻想曲 Five o'clock fox-trot : fantaisie extraite de “L'enfant et les soltilèges”》。ラヴェル作曲のオペラ《子供と魔法 “L'enfant et les soltilèges”》からの抜粋をジル＝マルシェックスが編曲した作品。
- <sup>4</sup> Œuvres No.64 Concerts de propagande donnés par M.Gil Marchex à Tokio 8 Décembre 1931 M.D. de MARTEL, Ambassadeur de la République Française au Japon à Son Excellence Monsieur BRIAND Ministre des Affaires Etrangères à Paris
- <sup>5</sup> 「目下本邦に滞在日本音楽を研究中なるが、その努力及成績見るべきものあり。最近研究費に窮しつつあるにより、七月より向こふ一年間月百五十円の奨学金を授与」『国際文化振興会月報』1937年3月号。
- <sup>6</sup> 芦田均、G.Bonmarchand、花柳壽美、岩崎小彌太、小林千代子、黒田清、牧山美子、松井慶四郎、J.Mazeaud、宮城道雄、岡見富雄、大倉喜七郎、曾我祐邦、大澤壽人
- <sup>7</sup> 増澤健美、中島健蔵ほか「日本作曲界の歩み」『音楽芸術』第14巻第8号、1956年。
- <sup>8</sup> 松平頼則「ヂル・マルシェックスを訪ふ」『音楽新潮』第8巻第5号、pp.13-15、1931年。
- <sup>9</sup> Gil-Marchex “La Musique Moderne Japonaise” *France-Japon* No.25 (1939)
- <sup>10</sup> Gil-Marchex “La Musique Moderne Japonaise” *France-Japon* No.25 (1939)
- <sup>11</sup> Gil-Marchex “La Musique au Japon” *La Revue musicale* No.120 (1931)
- <sup>12</sup> Gil-Marchex “La Musique Moderne Japonaise” *France-Japon* No.25 (1939)